

Bookstart Newsletter



2017
春
No.56

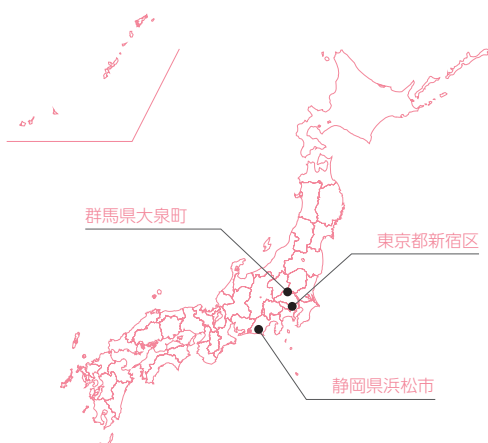
ブックスタート・ニュースレター



群馬県大泉町

特集

多文化共生社会の実現に向けて ～ブックスタートや図書館での取り組み～



2016年現在、日本で暮らす外国人の人口は約230万人、その国籍や出身地は190か国を越えています（法務省在留外国人統計2016年6月より）。日本に定住する人も多く、2世代目、3世代目の方々が増えてきました。こうした中、地域に生まれたすべての赤ちゃんや保護者を対象とするブックスタートでも、人数の多い少ないに関わらず、外国にルーツを持つ方への対応について考える必要があるのではないのでしょうか。今回の特集では、外国の方が多く住む地域でのブックスタートの様子や、絵本にふれられる環境づくりについて、3地域の具体的な取り組みを取材しました。

CASE 01

群馬県大泉町

大切なのは
「特別な」配慮よりも、
「あなたに伝えたい」
という気持ち

大泉町では1990年代から、町内にある企業が外国人労働者を積極的に受け入れており、2016年には町民の約17%、53か国の外国籍住民が生活しています。ブックスタートを受けた約半数が、外国にルーツを持つ親子だったという日もあるという大泉町では、多様な対象者へどのように対応しているのでしょうか。

日本語でも楽しい絵本のひととき

7か月児健診で行われるブックスタートでは、読みかきせを日本語で行います。取材当日は『だるまさんが』（作・かがくいひろし／ブロンズ新社）を楽しむ親子の様子が、あちらこちらで見られました。だるまという、日本特有のものを題材にした絵本ですが、そのユーモアあふれる動きに合わせて赤ちゃんの体を動かしたり、絵に釘づけになっている赤ちゃんを、ほほえま



絵本でふれあいを楽しんで

しく見守る保護者の姿が印象的でした。読みかきせの後、日本語がわかる方には「同じ群馬県の高崎市でたくさん作っているですよ」と、だるまの説明をするボランティアもいました。

アンケートは多言語で

ブックスタート・パックの中には外国語が併記された図書館案内を入れています。また、すべての対象者の声を正確に把握するため、日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語のアンケート用紙を用意し、対象者に合わせて配付しています。

「特別な」配慮は必要か

言語や文化が異なる対象者と接する上で、赤ちゃんの頭をなでるなど、日本では親しみを表すようなことでも快く思わない方がいることを、関係者同士で共有しています。一方で、スタッフのみなさんは、外国の方に対して「特別な」配慮は必要ないとおっしゃいます。「日本人への対応が画一的でないように、外国の方に対して、一人ひとりに向き合います。そして求められた時に適切な対応ができればよいと思うのです。たとえば言葉がわからなくて



大泉町のみなさん



親子一組ずつに向き合って

CASE 02

静岡県浜松市

外国にルーツを持つ
親子の元へ足を運ぶ

も、あなたにこれを届けたい」という思いがあれば、身ぶり手ぶりでも伝わります。私たちは外国の方も含めたすべての親子に心を開き、赤ちゃんのことを思う気持ちを、保護者と共有したいと願っているだけ。だから気負わずにいい。普通でいいんですよ」

浜松市では、図書館、保健福祉センター、ショッピングセンターを会場としてブックスタートを実施しています。対象者への周知に力を入れている中で、情報が届きにくい外国の方と、必然的に出会える場を作るための取り組みも行っています。

※浜松市の0歳児健診は病院での個別受診

赤ちゃんのパスポート取得に合わせて実施

日本で生まれた外国籍の赤ちゃんは、パスポートを取得する必要があります。浜松市では、フィリピン人住民

が中心となって活動しているNPOと、フィリピン大使館、総領事館が協力し、年1回パスポートの申請を受け付けるサービスを行っており、手続きには必ず赤ちゃんとその保護者がやってきました。そこで、2016年度からこの場に図書館員が出向いて、ブックスタートを行うことにしました。

当日はフィリピンの公用語である英語と、母語として使う人が多いタガログ語の通訳が同席しましたが、実際には英語がわからない保護者が多く、タガログ語か、簡単な日本語での会話を求められました。図書館で多文化サービスを担当している鈴木早苗さんは



1. 絵本のひとときに目を輝かせる子どもたち
(写真提供：浜松市)

「母語であるタガログ語で話せることは、保護者の安心感につながっているようでした」とおっしゃいました。

申請手続きを待つ間、赤ちゃんだけでなく子どもたちにも絵本を読みました。（写真1）以前から、手続き中に子どもたちの待てる場所がないことが課題になっていたため、親子からはもちろん主催者側からも、読みかきせは大変好評だったそうです。鈴木さんは「絵本の内容も面白かったのですね」と、それ以上に、子どもたちは読んでもらうことが嬉しくてたまらないという様子でした。また、絵本に夢中になっている我が子を見た時の、保護者の幸せそうな笑顔も印象的でした。絵本を介して人とふれあうことが、子どもたちにとってこんなに心地よいことだったのだと、改めて心に響くものがありました」と話してくださいまし

日本語の資料をそのまま翻訳した だけでは不十分なこともある

ブックスタートや図書館について説明したパンフレットの多言語版を作成しようと、総領事館に相談した際、「日本語版をそのまま翻訳しても意味がな

COLUMN



中央図書館
主幹・館長補佐 司書
高瀬 理子さん

すべての子どもたちの健やかな成長を願って

図書館は、国籍や性別、年齢、宗教などを問わず、地域住民すべてに開かれた場所。そして、利用に支障がある人への対応を考えるのが図書館員の役目です。外国人だから、障がい者だから、高齢者だから、といったことに関係なく、多くの人に利用してもらいたいと思います。

浜松市は少子高齢化が進んでおり、このまちで暮らす外国の方の存在は欠かせないものになっています。同じ地域に住む外国人と日本人が理解し合い、尊重し合い、育ち合う……。そのために図書館で提供できるものを、考えていく必要があると思っています。

このまちに生まれ、育ち、この地域の力になってくれる人が豊かに育ってほしいという願いは、国籍を問いません。だからこそ、すべての赤ちゃんにブックスタートを行うことで、「みんな同じように絵本をもらったよね。同じ住民だよ」という意識が地域に浸透していく。そんな未来を思い描いて活動しています。



英語、中国語、ポルトガル語版があります

語版のパンフレットには、ブックスタートを実施している場所と日時に加え、会場で行われることを詳しく紹介しています。

CASE 03

東京都新宿区
人となつなぐことで
様々な多文化
サービスを展開

2016年の新宿区の人口のうち、およそ12%が外国籍住民です。さらにその割合が約40%と高い地区にある大久保図書館では、多文化サービスに力を入れています。

館内には外国の方に向けた工夫が満載

外国にルーツを持つ親子も多く利用する大久保図書館では、約700冊の



1. 外国語の絵本の案内掲示
英語、韓国語、中国語、日本語が併記されています。

外国語の絵本を所蔵。日本語の案内掲示には、ひらがなでルビをふり、外国語も併記するなど、随所に工夫を施しています。(写真1・2)

個人や団体と協働した
様々なイベント

図書館では職員が行う催しのほか、関連団体や個人の協力を得て様々なイベントを行っています。

多言語のおはなし会

月に1回ずつ、英語と日本語、および韓国語と日本語によるおはなし会を行っています。また、2015年には



2. 英語、韓国語、中国語の絵本には利用者が母語の絵本を探しやすいよう、背表紙にテープを貼って色分けしています。

翻訳者の方と協働で、アラビア語のおはなし会も開催。絵本の読みかせと合わせて、民族衣装の試着もできるようにしました。ネイティブの方だけでなく、日本人からも大変盛況で、翌年も企画しました。(写真3)

語での読みかせも行っています。
コリア・スクエア・ガーデン
近隣の高麗博物館との協働で開催。絵本の読みかせやチャマチョゴリの試着、韓国の折り紙などの体験が好評です。(写真4)

おはなし森のわくわくキャンプ
子どものアウトドア活動を推進しているNPOと連携して開催。会場内にテントを張り、参加者の中で自由に絵本を読むことができるようになっています。また、ミャンマー語、タガログ語、タイ語のネイティブ話者を別のNPOから派遣してもらい、各言



3. アラビア語のおはなし会のチラシ
日本語とアラビア語で両面印刷されています。日本アラビア協会を通じて広報を行いました。



4. コリア・スクエア・ガーデン
同じ絵本の日本語版と韓国語版を各言語で交互に読みかせ。(写真提供：新宿区)

情報を届けるためのパイプを作る

多文化関連のイベント情報は、区の担当部署が、英語、韓国語、中国語に翻訳し、ウェブサイトで広報します。また、近隣の幼稚園や小学校、日本語学校にもチラシを配布しています。さらに幼稚園の入園時には全員に図書館カードを発行しているため、園児たちはお散歩がてら定期的に来館し、本を借りていきます。こうした取り組みが実を結び、近隣の幼稚園、小学校に在籍する子どもの家族は、外国人が日本人かに関わらず、図書館を日常的に利用しています。

日本語学校の先生とのパイプも太くなりつつあります。先生方の、外国人の生徒に地域のことを知ってほしいという思いとつながり、生徒の図書館見学も実現しました。

それでもなお、外国の方の中には、図書館の存在を知らなかったり、知っていても自分たちが行ってもいい場所だと認識していない方もいます。そうした方々にどうやって情報を届けたらいいのか、現在も模索を続けているそうです。

COLUMN

大久保図書館 館長 米田 雅朗さん



外国人と日本人の相互理解を広げるために

多文化サービスに力を入れる目的は二つあります。一つは、母語や母文化にふれられる機会を設けることによって、外国の方に自らのアイデンティティを大切にしてもらうこと。もう一つは、日本人に異文化を感じてもらうことです。こうした取り組みは、外国の方に偏ったサービスだと思われがちですが、それは全く違います。同じ地域に暮らす外国人と日本人、この二つの車輪を回すための軸が相互理解であり、これこそが多文化サービスの意義なのではないでしょうか。

しかし、図書館単体でできることには限界があるのも事実です。一方で、多文化関連の活動をしている方々は、企画を実現できる場所や機会を探していることが多くあります。だから私は、様々なニーズを拾うため、できる限り図書館から出かけて、色々な人と情報交換するようにしています。常にアンテナを張っていれば、お互いの思いがうまく結びつくことがあるんです。知恵を出し合えば、できることがたくさんあると実感しています。

外国籍住民が多い新宿区でも、時には多文化サービスの重要性を理解してもらえないことがあります。外国の方があまり多くない地域で理解を得るのは、さらに難しいかもしれません。それでもなお、岩に爪を立てる覚悟でその必要性を訴え、企画した事業を実施していくしかないと思います。やり続けていれば、いつか必ず共感してくれる人に出会えます。まずは情報発信をして、協力の輪を広げていくことが大切だと考えています。

おわりに

今回、お話を伺ったみなさんに共通する点は、国籍を問わず、同じ地域に暮らす住民一人ひとりに向き合い、理解しようとする優しいまなざしでした。「みんないっしょだよね」という

思いを持ち、必要な時に自然と手を取り合えるあたたかい関係が地域に広がること、それが多文化共生の姿なのだと感じました。

アドバイス ブックレット 多言語版について



NPO ブックスタートでは、外国にルーツを持つ保護者にも、活動の趣旨を正確に伝えるために、「アドバイス ブックレット 多言語版」を8言語でご用意しています。ぜひご活用ください。

福岡県筑後市立図書館 館長

一ノ瀬 留美さん

佐賀市立図書館勤務を経て、2006年4月、筑後市中央公民館図書室(2011年、図書館開館)室長に。プライベートでは、小学校での読みきかせボランティア活動などにも携わる。二男一女の母。



すべての取り組みは、「一人ひとりに向き合うこと」と「公平性」の延長線上に

筑後市立図書館は「生活とともにある図書館」をコンセプトに掲げ、その取り組みは新聞やテレビなどでも度々取り上げられています。確固たる信念と持ち前のバイタリティで、様々な事業を立ち上げている館長の一ノ瀬留美さんに、ブックスタートや図書館事業への思いを伺いました。

ブックスタートは市民や他機関と連携して行われる事業ですが、筑後市ではどのような体制づくりをしていますか？

筑後市では、ボランティアをはじめ健康づくり課、子育て支援課と連携しながら、4か月児健診でブックスタートを実施しています。職員同士も仲がいいんですよ。

ただ以前は「思いのこもったプレゼントなんですから。絵本の無料配付」という言葉は使わないでください」「ボランティアさんにも必ず挨拶をしてくださいね」などと、気になることがあれば、他課の職員であっても話をしに行くようにしていました。きつと、嫌がられていたと思います(笑)。でも、ブックスタートは図書館の事業というより、地域が元気になる「市」の事業なんです。私が図書館のことだけを考えて言ったのなら、理解は得られなかったでしょうが、重要なのは、筑後市に生まれた赤ちゃんにすぐ育ってほしいということ。それはみんなに共通した願いですよ。それに、図書館だけでなく市全体で子育てを支えます、というメッセージだからこそ保護者に伝わるものがあると思うんです。だから、日頃から他課とよく話をして共通の意識を持ち、力を合わせていくことが大事だと思っています。



ボランティアは、地域活性化の要です

筑後市のブックスタートの自慢は、素晴らしいボランティアがいることです。忙しい方が多いのですが、「この活動には、お金には代えられない価値がある」「本当に楽しく、元気をもらえるので辞められない」と、時間を割いてくれます。地域の先輩が親子を支えることは、地域活性化の要だと思います。

皆さんに元気に活動してもらうため、図書館として何をすべきかを常に考えていますが、ボランティアにも自立した存在として活動してもらうことが大切です。そのため、例えば出欠確認をボランティアに任せるなど、事業の運営に積極的に関わってもらえるような体制づくりもしています。

行政内に理解を広げる

毎年、市長や教育長に会場に来てもらうのですが、それはボランティアのモチベーションアップ

のためだけでなく、実際の活動を知ってほしいと考えるからです。行政のトップに事業の意義を理解していただかないと、ブックスタートの継続は難しくなります。また、市の職員の中に、一人でも多くの図書館理解者がいることも重要です。そのため、2〜3年で異動になる行政職の職員にも、図書館の役割を深く理解してもらうことを意識して、日々の業務を行っています。今では、異動後もボランティアとして関わってくれる人もいて、図書館を応援してくれる職員が増えています。私が館長として行っているのは職員の意識改革と言ってもいいかもしれませんね。

子育てを応援する様々な事業を行っています。そのアイデアはどのように生まれたのですか？

例えば、利用者向け託児サービスは、私の子育て経験から、赤ちゃん連れでもゆとり図書館が利用できるようにと企画しました。また、高齢者など図書館に出向くのが難しい人のために始めた宅配サービスは、子育て中の保護者にも好評です。図書館では様々なサービスを考える上で「公平性」

を大事にしていますが、市内の赤ちゃん全員が対象となるブックスタートをはじめ、すべての事業はその延長線上でつながっているんです。

子どもは親を選べないですよ。だからこそ、子どもたちのためにいい社会環境をつくってあげたいという思いもあります。中高生を対象とした「夢発見！なるには講座」では、様々な職業の方を招き、話をしてもらいます。その中で、例えば経済的に恵まれなくても通信教育で夢を叶えた先輩のエピソードに、子どもたちが悩んでいることへの解決策が見えてきたりする。こうした講座を通して、図書館を使うことで少し将来が明るくなるというメッセージを、中高生に届けたいと考えています。地域全体で子育てに関わることで、子どもも健やかに育っていくだろうし、保護者もし楽になるのではないのでしょうか。

一人ひとりの利用者にきちんと向き合っていく先に、いろいろなサービスがあると思っています。

保護者が少しでも元気になるように

ある時、何度か図書館を利用されていたお母さんが、子育ての悩みに関する本をたくさん手にしてカウンターに来たことがあったんです。少し気になる様子だったので、どうしようか迷いつつも「お子さん何歳やった？子育てはどう？」と声を



かけました。すると、「大変。ちよつとキツイです」という返答だったので、場所を変えて二人で話をしました。「これだけ本を借りているんだもの。お母さんの気持ちは、きつとお子さんに伝わっているから大丈夫。今度、お子さんと一緒に図書館に来んね」と言葉をかけると、ボロボロ泣かれて……。でも、その涙で元氣になったのか、週末になるとお子さんと一緒に来館してくれました。ブックスタートでも、保護者の話にボランティアが30分以上も対応することがあります。保護者の悩みに答えを出す訳ではないけれど、話を聴くことで、保護者が少し元氣になる。こうした対応は、一組一組の親子に向き合うからこそできることですし、それがこの活動の醍醐味だとも思っています。

行ってきました！／ 長野県辰野町

【ブックスタート開始年月】2005年1月

【年間出生数】120人

【実施機会】9か月児育児相談

【事務局】図書館

【連携体制】図書館、保健福祉課、ボランティア



辰野町はブックスタートを開始して12年目

会場では、図書館員やボランティアが、一組ずつの親子へ絵本を読んで、パックを手渡します。ゆったりとした雰囲気の中で、赤ちゃんが絵本をじっと見つめたり、手を伸ばしたりすると、保護者が嬉しそうに赤ちゃんの顔をのぞき込みます。ボランティアが子育て支援マップを広げて、図書館の場所を案内すると、保護者は笑顔で「今度行ってみようと思います。楽しみです」と答えていました。

様々なフォローアップ事業を展開

2012年度には、3歳児に再度絵本を手渡す「セカンドブック事業」を開始。更に2015年度からは、事業開始10周年を機に、ブックスタートで、絵本のほかに保護者向け書籍をプレゼントすることも始めました。あそびうたや詩集、子育てなど5種類の書籍から1冊を手渡すもので、大変好評です。新たな予算が必要になったものの、これまでにブックスタートを受けた保護者にアンケートを取り、回答者全員が「ブックスタートを受けて良かった」と回答したことが予算獲得の大きな力になりました。また図書館では、赤ちゃんや未就学児向けのおはなし会も行っています。赤ちゃん向けのおはなし会には保健師が毎回参加しているので、おはなしを楽し



おはなし会のあと、保健師（右）とお母さんが和やかに交流
(写真提供：辰野町)

んだ後に、保健師も交えて自由に話をしたり、気になることを相談できる機会になっています。

図書館員の吉澤志津江さんは「今のお母さんは、たくさんの情報に囲まれて、迷いながら子育てをしていると思います。だから誰かに話を聞いてもらったり、声をかけてもらえたりする“場”を提供するのも、図書館にできることだと思います」と話してくださいました。

ボランティアとともに



こうした事業や保育園・

学校での読みきかせなど、

子どもの育ちに合わせた

活動を支えるのは、約50人のボランティアです。図書館員とボランティアは、15年以上、毎月勉強会を行い、ともに学んできました。どんなテーマの時も、子どもの立場に立って考えることを最も大切に、知識を深めてきたそうです。

吉澤さんは、「ボランティアさんとともにやってきた事業のひとつひとつが、今は点から線につながってきたように感じます。これらは目には見えないけれども、子どもの根っこを育てていく大切な事業。これからも、子どもたちの健やかで幸せな育ちを応援していきたいです」とおっしゃいました。

親子のためにできることを考え、着実に形にしてきた辰野町。皆さんのあたたかな思いは、これからも、様々な取り組みを通じて親子にしっかりと届いていくのだろうと感じました。

新刊案内

「子ども・社会を考える」講演会シリーズ vol.3
『社会で子どもをはぐくむ』

武田信子（臨床心理士）

定価：本体500円＋税（送料込）

2016年3月に大阪市で開催したイベントの記録集を刊行しました。実施自治体の事務局ご担当者様に1部ずつお届けしましたので、ぜひ皆様でご覧ください。

※NPOブックスタートWEBサイトから購入できます。

